

キブツは日本の進路を示唆す (2)

本文は、キブツ研修生の家族の方々にも、ぜひ読んでいただきたい。そして、キブツの時代的な意義を理解してもらいたい。

手塚 信吉

キブツは資本主義国で成長した

これからの日本は、いやでも中国の思想文化の影響を強く受けざるをえないであろうが、いまの日本の国内事情では、その思想文化の波にさらされて混乱をおこす恐れが多分にあると思うが、その防波堤の役割りを果たしうる思想文化はキブツのそれであろう。キブツと人民公社とは出発点は違っているが、底を流れる倫理観も世界観も同じであり、キブツははつきり資本主義も社会主義も超越した真理であるからである。

日本資本主義の根は深い。明治、大正、昭和にかけて百余年、政治、経済、社会、教育、宗教とあらゆる組織に食いついて、国民生活

そのものに結び付き、個人主義、個別対立、マイホーム主義と国民性化した資本主義根性は、あの敗戦半亡国時代でも、ついに改めえなかった。いや反って一層強烈な資本主義根性を助長させたぐらいである。

ここまで病こうもうに入つた資本主義根性を、日本国民の心奥から取り去ることは容易なものではない。従って、これから中国の異質な思想文化が流入すればするほど、資本主義の牙城を死守せんとする抵抗性をまして、新旧思想の激突となり、無益な国力の消耗をまねき、国運衰亡の恐れが多分にある。

ところが、キブツは元来資本主義文化の中でその欠陥は正のために生まれ育つた免疫性の強い協同体思想であるから、それを取り入れて消化吸収すれば、ソ連からでも中国から

でも、どんな異質思想が奔流してきても、たちまち中和作用を起こして刺戟にはなっても毒性とはなりえないであろう。キブツの思想も一種の革命思想ではあるが、他人に強い社会革命思想でなく、己れを陶冶鍛錬する自己革命思想であるから、いくら国内に普及されても、日本的な欠陥の補足に役立つだけである。

そして、キブツは人間平等観を核とした自由平等の社会で、加入も脱退も自由で、その健全性が人の心をひきつけて加入者を増し発展するだけであるから、どこにも無理がない。そして、キブツは同志的な集団であり、相互保障社会であり、拡大家族社会であって、対外的には資本主義国なり資本主義経済下に依存して一向に支障はないのである。

キブツ社会は自由平等、無搾取、皆労働、全員が経営者であって全員が労働者、二千人の集団でも長と名のつくものは一人もいない。すべては二年交替制の委員制によって運営されており、各人その能力に応じて働き、必要に応じて分配を受け、私有財産を持たず、キブツの全資産は共有であり、一人の落伍者も不幸なものもない理想社会である。

時代が要求する新経済とキブツ

昨年八月以来、あいにくニクソン爆弾声明に気もてんとせんばかりの政財界人も、その後の輸出入貿易の小康状態をみて一安心、年末ごろから樂觀論さへ台頭して株価の急騰ともなったが、果たしてそんな安易な状態であらうか。

ドルショック以来の経済界各方面の対策意見をみると、その何れも当面の仮縫策であつて、世界状況に対応した日本経済の方向転換の正論を知らない。日本の北京訪問者が周恩来総理と面談した対談中に、「アメリカ式の日本経済、高度過大な工業、資源の皆無、今後の日本はどうする気か。」と心配されているが、日本の軍国主義復活を警戒するのも無理ではない。どこからみても日本経済のあり方は侵略形であり、資源植民地を必要とする仕組みである。いくら日本が平和経済を唱えてみても、他国に通用するはずがない。

過去四半紀にもわたって、アメリカのアジア侵略戦争の片棒をかつぎ、火事泥式の軍需工業の発展、そのままの日本経済である。アメリカのアジア政策一変と共に転換必須の日本経済であるから、甘い仮縫策でお茶のこ

中国の人民公社も、その内容をきけばきくほど、その考え方もあり方も、キブツそっくりであるが、その生立ちが政治的指導力に負うところが多大であり、思想的未熟さもあり加入も脱退も自由というわけには行かない。この点からも日本のように教育水準の高い自由主義国の国民には不向きであらう。一方、人民公社では最低生活を保証しながらも、「能力に応じて働き、働きのに応じて分配する」という社会主義制度を残している点では、反ってキブツより日本人向きかも知れない。もつとも、イスラエルでも、すべてを協同化しながら生活だけは個別経済の「モシャヴ・シトフィ」もあり、日本の農協に似た「モシャヴ・オウディーム」もあるが、ここでは説明を省略する。

ドル王国、資本主義の総元締アメリカの大統領ニクソン氏までが、「世界の協同体の皆さん、対立の時代をおわり協同体の時代に入った」と言わざるをえないほど、世界の状況は協同協力化の必要にせまられている。人類は、正に対立観に亡びるか、協同体化に生きるか、その運命の岐路に立たされている。

乱世亡国化二百年、国民の大半が貧乏に苦しみ飢餓に泣きながら、世界列強資本主義国せる事態ではないはず。殊にニクソン爆弾の真意はその大半が日本向けであり、今日以後の日本は政治的にも経済的にも一人歩きが必要である。

永い米軍の占領下にあった沖縄も日本復帰が決定したが、これは佐藤政府の手柄でも何でもない。アメリカのアジア政策一変と財政縮小政策の結果にすぎない。この点を誤ると大変だ。いやそれよりも、日本は名目的には独立国であっても、実質的にはアメリカの従属国であつた。すなわち国防的には安保条約に依存してアメリカ原子力の傘の下にあり、経済的にはアメリカドルの傘の下にアツた。そしてアメリカのアジア侵略戦争の基地とされ、軍需物資の供給地とされ、思わぬ戦争成金気分と昭和の元禄と言われながら甘夢に酔いしれていたのである。

その矢先、突如としてニクソン爆弾声明となり、ドルの傘がやぶれて野晒しにされた日本経済である。果たして世界市場に於て独立歩の試練に耐えうるであらうか。全面的ドル依存の日本経済安定化は、やはりドル貸信用回復が必要である。そのためには日米輸出入貿易の均衡化を絶対必要とする。勿論アメリカも強く要求するであらうが、日本として

の餌食にされていた中国が、外敵を駆逐し国内革命成つて、中華人民共和国が誕生してわずか二十余年にして、八億同胞ごとく衣食住そのところをえて、一人の失業者も飢民もなく、希望にあふれた国民の姿、正に世界史上空前、古今東西未曾有の盛事、これこそ世界協同体時代の絶対見本であらう。

新中国は誕生尚日浅く、革命政権内部にも無理も欠陥もあらう。人間世界に完全はない。二世紀にわたる混乱無秩序時代の中国を思うとき、急造された人民公社にも、幾多の矛盾も弱点もあらう。今後もお幾多の曲折も変転もやむをえないであらう。だが、時代が大きく中国に味方している。世界の大勢は逆行を許さないものがある。革命中国の進行方向こそ世界人類の唯一の活路であらう。

その中国の思想文化が奔流となつて日本島に襲来するのだ。その奔流をがっちり受けとめて、中和作用で栄養剤として新日本の建設に役立てる為に必要なものが、キブツの思想文化である。当協会が年々多数の青年男女を研修生としてイスラエルに送る目的意義はここにある。

も回避を許されないものがある。明治以来の日米通商貿易は常習的に日本が入超国であり、戦時中五カ年あまり中断しただけで、アメリカ軍占領下の日本ははなはだしい食糧中心の輸入超過であつた。アメリカからみて、日本は伝統的に世界一の上得意先であつた。それが突如として勃発した朝鮮戦争に続いてベトナム介入戦争となり、富強を誇るアメリカも屋台骨がぐらつくほどの一大消耗戦の長期化で、漁夫の利を占めたのは日本であつた。求めずしてアメリカ軍の基地と物資の補給地となり、急速な工業の発展となつて、あらゆる高度水準の日本製品が大洪水の如く米本国にまで殺到して、米産業界を恐慌状態におとし入れたのみでなく、著しい片貿易でドル貨の流出甚しく、さすがのアメリカも悲鳴をあげる始末となつた。

そして、日本は政府も財界も、統制力も自肅力もなく、昔の外貨不足時代に輸出奨励政策として制定した税の減免、低金利優遇等々をそのまま放任して出血輸出に拍車をかけ、一層ドル危機に追い込んでしまった。百%ドルの傘下にある日本経済は、いやでもドル貨と一連托生の運命にある。国際通貨としてのドル貨の信用転落は、そのまま日本経済の危

機につながる。ドル貸保有高がアメリカ本国を凌いで世界第二位、一五〇億ドル以上を抱え込んでみても、それ自体何の意味もない。いや反って日本経済を不安に迫込む結果となるにすぎない。今、何より日米貿易に必要なことは、輸出入均衡化を急ぐことであり、それは直ちに日本工業界を大恐慌におとしれることであつて、簡単ではない。

輸出入貿易均衡化の必要は、アメリカだけではない。歴史的な親交国であるタイ国でも、対日貿易が輸入四億五千万ドル、輸出一億六千万ドルと、年々不当な片貿易の連続で外貨の枯かつに苦しみ、それが次第に対日感情の悪化につながり、遠からず重大問題化の恐れがあるという。この傾向は、インドネシアでもフィリピンでもアフリカの低開発国でも同じことで、良品廉価な日本製品を歓迎しながらも、非難の声が高まりつつあるのだ。

要するに、世界は資本主義的な搾取経済、利潤追求本位の商取引きは総批判を受ける時代となつて来たのである。日本経済の仕組みそのものが旧時代的で、自国の労働大衆を搾取したり、下請業の内職業者の女子供まで不当低賃金でさんざん泣かせながら、中小バイヤーと結託してボロ儲けをしている雄魚的輸

出業者のいかに多いことか。さらに悪質なことに、国内販売価格を不当に釣り上げて国民に過重負担を強いながら、出血輸出で相手国の産業を圧迫している業者の如何に多いことか。そんな自由貿易時代、ユニオンジャックの旗をなびかせて七つの海を圧した英国の植民地搾取貿易時代を夢みる日本経済は古い。放任すれば、遠からず日本品総スカンを食うであろう。

再建途上でいまは貧しい中国であるが、海外貿易は必ず輸出均衡主義であり、低開発国に対する援助借款は無利子である。これに反してアメリカは、中南米各国に貸与した援助借款だけでも二百億ドルの巨額に達しているが必ず利子がつく。古い資本主義的常識では当然であろうが、各国ともその利子負担に苦しみ財政悪化の一途を辿り、それがアメリカへの怨恨や悪感情に変わり、中南米に旅行してアメリカの悪口を言えば、タゲで泊めてくれるといわれるほど敵意に変わっている。そして、キューバでもチリでもパナマでもアメリカ資本の圧迫に耐えかねて共産主義国に変貌しているのだ。

そんなアメリカ資本主義を真似て、日本も東南アジア各国に有償借款をはじめているが、

「金貸しは仏もあとで鬼にされ」で必ずあとで怨恨に変わり、排日思想の種蒔きに等しい。借款には利子、貿易には利潤がつきもの、そんな考えが時代おくれなのである。協同体時代は相互扶助、対等共存の時代である。国内経済も、大衆搾取の上に成り立っている事業のあり方も、安く買って高く売る商業主義も協同体思想からみると罪悪である。海外貿易も同じことで、有無相通の均衡貿易の時代である。今、頭の切替を忘れたら、日本は世界の孤児となる恐れがある。

先にも述べたが、今後の日本はいやでも中国の思想文化の影響を強く大きく受けて、人間平等観の思想と不労所得を否定する天の声が拡大する一方であろうが、今の日本のような非民主的特権階級中心国家で、「軍隊まで階級制が全廃され、官公吏まで農民に奉仕する」新時代中国を真似ることは、難事中の難事であり、当然発生するであろう新旧思想の衝突から国民的不幸を招く恐れが多分にある。その場合、資本主義国イスラエルに生まれて健全に発展してきたキブツの思想も形體も経済性格も、日本のために大きく役立つであろう。キブツ研修生の任務は重い。

キブツは、人間平等観に徹した労働尊重の社会である

キブツの真価は人間平等観に徹した労働尊重の実践社会である。それと正反對に、資本主義国最大の欠陥は人間不平等観と労働卑下の思想を助長する点にある。資本主義国ではどんなに自由平等を叫んでみても、経済力のない一般国民大衆には画にかいた餅に等しい。労働尊重をどれほど唱えてみても、大衆搾取の上に成り立っている資本主義経済下では、労働の切売りで生活する外に生きる道のない労働者が卑下されるのは当然である。

人間不平等観と大衆搾取とを否定すれば、資本主義そのものも否定される。それでは、その資本主義の欠陥を突いて発生した社会主義が果たして平等公正な人間社会を生み、労働の尊厳が確立されたか。レーニン革命成って五十余年を経たソ連の現状をみれば判る。その後続々派生した社会主義国のどれをみて、自由平等も労働尊重もただ掛声だけに終わってしまった。

今の世界は民主主義時代であり、大半の国が多数決政治であるから、自由平等も労働尊重も国民大衆が切望すれば一回の選挙で実現



するであろうが、それがそうならないで、資本主義国でも社会主義の国でも特権階級を生じ政治も経済も支配されて、その特権階級本位に仕組まれてしまうのは一体どうしたことであろうか。世間では、政治家が悪いとか資本家が横暴だとか、特定の人を責めているが、実はその悪の根元は国民大衆の心奥にある利己心そのものにあるらしい。だから政治家も

資本家も浮沈常なく人は変わるが、同じ世の中の世の中、立場が変われば誰でも犯す罪悪であって、出世主義、功名主義、金儲け主義、共通本能こそ悪の根元である。

だから、人間の本能を意志の力で抑制しえない人ではキブツで辛棒はできない。従って、最初二、三十人の同志で創設して二、三十年後の今日五、六百人の集団に発展したキブツでも、その三倍ぐらいの人が脱退している。そんな脱落者もイスラエル国内に沢山いるので、彼等に会うとキブツの欠点や悪口をもらっている。資本主義日本に生まれ育った若者たちがそんな人と会談する機会があると誤解してしまう例が非常に多いのである。やはり本当にキブツを理解しようとするには現代社会の矛盾や不合理にあきたらず、己れを犠牲にしても住みよい人間社会の実現に挺身したいというぐらいい人でないといけないのだ。キブツ創設の先駆者は、みなそんな人々であった。

一九〇九年、ロシアから移住してきたユダヤ青年男女十二名が、「人間が神に近づく唯一の道は労働である。労働は自然と人間の調和であり、そこに神がある」というゴルドンの労働哲学を信条として、ヨルダン川畔の荒

地を炎暑と悪疫とに苦しみながら開拓をはじめたのが、キブツのはじまりデカニヤである。粘り強さと働きもので有名なユダヤ人中の先覚者たちが、人類の理想社会を目指して営々努力六十余年を経過したが、今もなおキブツは、二百五十集団、十万人足らずにすぎない。日暮れて道遠しの感ありである。

罪の子人間が良心的に生き抜くことの難しさでもあろう。だが、イスラエル国のキブツは単にそのキブツ社会の数だけで評価すべきでなく、三百万イスラエル共和国の中心勢力としての存在価値を高く評価する必要がある。それにしても、教養不足な利己主義的な人では近寄り難い社会である。それだけにキブツメンバー一人の労働態度の中にも信仰と理性の具現化をみることができ。

キブツメンバーたちの労働観の中に心から教えられるものを発見した。それは、支配する人も監督する人もない、無報酬の労働で、驚くべき勤勉さで喜々として働く尊さである。真の労働とはかくあるべきものか。そして、賃金で切り売りする資本主義的労働の空しさ、愚かさ不幸さをつくづく考えさせられたキブツの労働であった。

誰が考えたか資本主義、それは人間の利己

心だけを引き出す人格無視の制度である。人類の不幸も災いもそこにある。人間が資本の奴隷となって資本に奉仕する、そこに資本が資本を生む不労所得が発生し、富の偏在を助長し、その富に結びついた少数者の自由奔放、贅沢浪費に比例して、大多数の国民大衆が貧困と飢餓に泣くことになる。そして、奢るものからずで、やがてその富者もまた没落して行く。そんな愚かな繰返し人間社会の歴史でもあった。キブツはそんな愚かな人間の不幸から脱出するために生まれたものであるといえよう。

ユダヤ教とキブツの労働哲学

私は、よくキブツ研修を希望する人々に、只で働く喜びを正しく理解できればキブツ研修生として及第であると言うが、私自身が少年時代から重労働の体験者であり、半世紀以上も産業界にあって、人に使われ人を使い、それには必ず賃金が結びつき、賃金の刺激が労働意欲の源泉と考えていた。ところが、そんな常識はキブツでは全く通用しない。いや労働を金銭で評価することは邪道であること知ったのはキブツであった。

キブツの社会では二千人の集団でも長と名のつく人は一人もいない。全員が経営者であり全員が労働者であり、雇用関係でないから賃金もない。あるものは各自の自発的な良心だけである。そこに労働と自然との調和が生まれ、束縛のない自由の喜びがそのまま労働エネルギーに変わり、ゴルドンの労働哲学と合致するのである。勿論、資本主義的経済観からみて通用する常識ではない。

それにしても、労働の喜びとキブツの関係について、人間の理性だけでなくユダヤ教の信仰が大きく作用しているのではないかと考えて、滞在したキブツのメンバーたちに尋ねてみると、異口同音にキブツとユダヤ教とは無関係であるという。特に青年たちほど強く否定する。だが、ユダヤ民族とユダヤ教の関係を思うと、やはりキブツ思想とユダヤ教とが全く無関係とは考えられず、文献で調べてみると、世界の代表的な宗教の中で労働宗教と言えるのはユダヤ教だけであった。

仏教は面壁九年の達磨大師に象徴されるように、静寂の宗教であって、仏に仕えるものは高僧になればなるほど座して動かず、布教巡歴も不労托鉢を主としている。回教は礼拝の宗教と言われ、一般信徒までが白昼長々と

礼拝に時間を費し、労働を尊重する教義もない。だから回教民族に貧困者が多いのである。東南アジアを旅行したものは誰でも気付くであろう。あんな礼拝時間を半分にすれば労働をしたら、もっと豊かな文化生活ができるものを、何んと愚かなこととよ。

ところが、ユダヤ教は違う。ユダヤ教のラビは仏教の僧侶にあたり、キリスト教の牧師にあたるが、ラビはユダヤ教の戒律により一日の三分の一は労働で自らの生計を立てながら、神に仕え信徒に奉仕せねばならぬ。高德のラビほど労働を尊重する。また、布教のためにも信徒から金品を受けないのだ。

ユダヤ教は旧約聖書以来、民族宗教であって、信仰と労働とを不二一体化し、労働こそ神への奉仕と考え、ゴルドンの労働哲学もそこから生まれている。

キリスト教はユダヤ教から派生したもので教義も一致点が多く行動的な宗教であり、キリスト教全盛の西欧に産業文化の開花をみたのも当然であろう。異論もあろうが、私の知るかぎりでは、教義戒律の上ではっきりと信仰と労働を結びつけた宗教はユダヤ教が第一である。労働尊重第一のキブツを理解するには、ユダヤ教を無視できない。仏教国日本

人の勤勉性は非仏教にある。日本人は仏教化は取り入れたが、信仰にはなはだ不熱心であった。

キブツは人間性回復の道場である

キブツの人間平等観といい、無搾取皆労働といい、協同一体生活といい、すべては人間社会のあるべき姿への反省であり、良心の目覚めであって、キブツ社会は人間性回復の実践道場といえよう。

近代世界は目まぐるしいまでに科学が進歩し物質文化が発展しているが、その科学が進歩し物質文化が発展すればするほど、人間性の本質である精神面が退化して、反って人間砂漠を思わせるものがある。それでは真の人間社会の進歩発展とはいえないであろう。今日のように物質文化の発展に比例して精神文化の退歩を招く現状を放任したら、遂に人類は絶滅する外はあるまい。この点に気付いた反省運動が各種各様の姿で世界の至るところに発生しており、キブツも大きくその役割りを果たしていると言える。

日本人なら誰でも、奈良や京都の由緒ある古代寺院建築や古仏像をみて気付くであろう

が、天平、飛鳥、平安時代の物心両面の渾然一体化した文化的遺産、その心の底から引きつけられる霊力に接して、一千余年の歴史を振り返って近代日本文化を誇る資格どころか、祖先に対して赤面するほど文化の退歩を感じるのである。

確かに物質文化の進歩発展の著しい現代であるが、その反面で精神文化の退歩を恥じなければならぬ現代である。物質文化を誇ってみても試験管の中からボーフラ一匹生みだせない幼稚さでは、神の前に平身低頭する外はない。人類が精神文化を置き忘れては不具の文化となる。そこに幾多の矛盾や不合理を生み、神への冒瀆ともなり、諸々の人間社会の不幸はそこから起こるのである。

また物質文化に偏して科学の進歩も偉大な発明も、資本主義の餌食として対立葛藤、奪合いに終始する人間社会は、人類絶滅の一里塚にすぎない。近世百年間で人口が六倍に増加しいよいよ狭くなった地球上で人類が仲良く暮らすためには、新しい生活原理に基く人間社会が必要なのだ。それがすなわち協同体社会キブツなのである。人間性回復の道場としてキブツ社会は絶好のものである。

ミニ・ニュース

二つの都市「共同体」の誕生

▼名古屋のFIWC東海委員会の人たちが「共同生活体」をつくり出した。これは、彼らが以前から追求している社会福祉における「施設共同体」へのワン・ステップだという。ここでは、「共同図書館」があったり、研究会などの会合がおこなわれたりしている。

▼東京のドマんに自分たちの「家」――「ふるさと」を創ろうと、山岸会東京支部を中心とする若者たちが「共同部屋」をつくり出した。土方をやったつった資金で家を借り、会費で維持するとのこと。この「共同部屋」の機能は、①だれでも気楽に集まり、対話、情報交換、会合、宿泊、昼寝、冥想する②傷ついた人の憩いの場、闘う人の根拠地、「ふる里」像の探求の実験場③自分の最大限の可能性を開発する空間、などだそう。東京砂漠の中で、こうした一見地味な活動がつまみ重ねられることは、実は大きな意味があるのではない。